

1 事業名 **さんべミニ冬まつり**

2 必要性

「今後の青少年の体験活動の推進について」（中央教育審議会答申・平成25年1月21日）によると、「人間関係能力の低下」、「異なる他者と協同する能力の必要性」、「遊びや体験の場の『本物』を見る機会の減少」などが青少年の問題として取り上げられている。また、「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」（国立青少年教育振興機構・平成22年10月14日）によると、「小学校低学年までは友だちや動植物とのかかわり、小学校高学年から中学生までは地域や家族とのかかわりが大切」などの調査結果が出ている。

これらを踏まえ、当施設では国立の青少年教育施設として、青少年育成に携わる団体や人材と連携し、青少年の健やかな成長にとって、様々な体験活動を実施することが、いかに重要であるかを広く社会や家庭に広めていかなければならないと考える。さらに、そのきっかけづくりとなるような体験活動の機会を提供することも今後より一層求められる。



3 趣 旨

当施設の活動プログラムを提供することを通して、体験活動の楽しさを啓発し、今後の施設利用の促進や体験活動実施の普及を図る。また、家族の絆を深めることや基本的な生活習慣を確立するきっかけづくりを行う。併せて当施設の法人ボランティアが事業の企画・運営を通してリーダーシップを身につけ、リーダーとして必要な資質の向上を図ることをねらいとする。

4 期 日

平成26年2月22日（土）～2月23日（日）（1泊2日）

※法人ボランティアは前日の21日（金）から準備のため入所

5 参加者

(1) 募集対象・人数 幼児、小学生とその保護者 150名

(2) 参加人数 175名 50家族

(3) 参加者分析 毎年人気の事業であり、定員150名の募集に対して、70家族251名の申し込みがあった。参加者の居住地域の内訳は、下表のとおりである。

参加者の本事業への参加のきっかけは、「チラシを見て」という回答が34家族あり、最も多かった。また、参加家族50家族のうち14家族が新規の利用であった。

地域	家族数
松江市	14
雲南市	4
出雲市	19
浜田市	3
大田市	1
広島県	9
計	50

参加者居住地域内訳

新規・継続	家族数
新規	14
継続	36
計	50

参加者施設利用実績

6 講師（研修指導員）

歩くスキー（4名）・・・今岡 稔郎 狩野 祥文 宮脇 進 恒松 俊明
自然観察（2名）・・・坂本 弘治 柳楽 天児

7 参加経費

大人 2,450 円 小学生 2,400 円 幼児 1,780 円 3 歳以下 100 円

※選択プログラムで三瓶自然館サヒメルでの天体観察会に参加する家族は別途料金（大人 240 円・小人 80 円）が必要となる。

8 事業の内容

(1) 事業の特色

本事業は、冬季における当施設の一大イベントとして位置づけている。家族を対象に冬の三瓶を満喫できるよう、3 つ以上のプログラムを設定する。プログラムは選択とし、その家族構成や子どもの年齢等の発達段階に応じた体験を提供できるようになっている。また、本事業では当施設の法人ボランティアが一部のプログラムを企画・運営するという特色がある。初日の夜の選択活動及び2日目の午前中の活動について、法人ボランティアが中心となり家族同士の絆を深めるために参加者にプログラムを提供する。

(2) プログラムデザインと企画のポイント

プログラムは、①冬の三瓶を満喫できるプログラム、②家族の絆を深めることのできるプログラム③家族同士の交流ができるプログラムの3つをテーマとして構成した。また参加者自らが自分の実施したい活動を選択し、意欲的に活動に取り組めるようにした。

①冬の三瓶を満喫できるプログラム、②家族の絆を深めることのできるプログラムとして、「歩くスキー」、「スノーシュー&かんじきハイキング（自然観察）」、「そりすべり」の3つを設定した。「歩くスキー」、「スノーシュー&かんじきハイキング（自然観察）」については、研修指導員に指導を依頼し、より本格的な体験を提供できるようにした。また、家族の絆を深めることのできるプログラムをねらいとしたため、家族と一緒に活動するようにした。

③家族同士の交流ができるプログラムとして、法人ボランティアが企画・運営するプログラムを設定した。意図的に家族と家族の交流が図れるようなレクリエーションやゲームを行った。本事業の特色ともいえる法人ボランティアによるプログラム提供については、島根大学及び島根県立大学の学生が、事前に当施設で打合せをする機会を設け、3つのテーマをもとに家族に楽しんでもらえる内容を企画した。施設での内容検討の他に、各大学においても話し合いの機会を設け、当日の運営に備えた。

(3) 広報のポイント

広報については本事業のチラシを作成し、近隣（松江市・出雲市・三次市・雲南市・大田市）小学校に教育委員会を通じて 29,300 部配布した。また、報道機関には記者クラブを通じてチラシを配布し、広報を依頼した。さらに、平成 24 年度本事業に参加した家族に対してもチラシを配布し、参加を呼びかけた。

(4) 日程表

	11:00	12:00	13:00	17:00	19:00	21:00	22:00
2/22 (土)	受付 オリエン テーショ ン	昼食	選択活動 A.白銀の世界へ歩くスキーで 出かけよう B.動物の足跡みつかるかな？ かんじきハイキング C.そりでコースを駆け抜けよう	つどい 夕食 入浴	選択活動 A.学生お楽しみ企画 B.冬のお星さま観察 C.絵本の読み聞かせ D.自主活動	自由	就寝

	6:30	9:30	12:00	13:30
2/23 (日)	起床 つどい 清掃 朝食	大学生のお兄さん・お姉さんと 遊ぼう！学生お楽しみ企画	昼食	退所

(5) 内容

・**選択活動① A「白銀の世界へ歩くスキーで出かけよう」**

参加者の年齢やその日の体調、経験の有無などによって、当日にグループをつくり、活動をした。装備の選択や装着方法を当施設職員が指導した後、グループ毎に活動をした。各グループに1名の講師及び3名の法人ボランティアを配置した。歩くスキーは、他の活動と比べて道に迷う危険が高いため、人数把握のためにすべての参加者にゼッケンを着用させた。



・**選択活動① B「動物の足跡みつかるかな？かんじきハイキング」**

全体で装備の選択や装着方法を当施設職員より指導した後、2コースに分かれて活動をした。2名の講師から三瓶の動植物について解説を聞きながら冬の自然をゆっくり味わった。ただ歩くだけではなく雪の滑り台で遊んだり、途中で暖かいスープを飲んで休憩をしたり、幼児を飽きさせない工夫を取り入れた。



・選択活動① C「そりでコースを駆け抜けよう」

交流の家で積雪時に常設している2コースに分かれて活動をした。滑り方やそりの止め方、注意事項を当施設職員が指導した後、プラスチックそりやスノーレーサー、円盤そりなどを使って思い思いにそり滑りを楽しんだ。1コースに3~4名の法人ボランティアを配置して、安全管理の徹底に努めた。



・選択活動② A「学生お楽しみ企画」

「家族同士の交流ができるプログラム」をテーマとし、体を動かすゲーム、人さがしビンゴゲーム、松ぼっくりタワーなどのレクリエーションゲームを行った。家族はもちろん、他の家族とも交流を深め、盛り上がった。プログラムの運営は事前から準備を進め、法人ボランティアが各チームに分かれて担当をした。



・選択活動② B「冬のお星さま観察」

当施設から徒歩5分のところに立地する三瓶自然館サヒメルの天体観察会へ参加した。天文の学芸員から星の解説を聞いたり、天体望遠鏡を使って星を観察したりして冬の澄んだ空気の中、家族で星を眺めた。併せて行き帰りの真っ暗な道を懐中電灯を持って歩くナイトハイクも行った。

・選択活動② C「絵本の読み聞かせ」

当施設職員と法人ボランティアで読み聞かせを行った。大型絵本や音楽を取り入れて楽しく活動を行った。また、「よふかしおにとはやねちゃん」の紙芝居を行い、参加者へ「早寝早起き朝ごはん運動」の啓発を行った。



・「大学生のお兄さん・お姉さんと遊ぼう！学生ボランティア企画」

参加者全員を対象に法人ボランティアが企画したプログラム「さんべゆきりんピック 2014」を実施した。家族間の絆が深まることをねらいとし、7つの種目を（まとあて、スノータワー、スノーフラッグ、しっぽとり、スノースローイング、宝さがし、つなひき）を設定した。会場を3つのブロックに分け、各ブロックとも、時間で種目を入れ替えるなどの工夫を行い、家族間はもちろん参加者と法人ボランティアとの交流も深まり大いに盛り上がった。



(6) 運営のポイント

- 当事業は、26名の法人ボランティアが活動の支援をする事業であるため、法人ボランティアの名前と顔を掲載した掲示物を作成したことと参加者全体に配布するしおりに同じものを掲載し、法人ボランティアと参加者の交流が図れるよう工夫した。
- 参加者数が175名（50家族）と多く、その内新規利用の家族も14家族と多かったため受付や移動、集合に時間を要したり、混雑したりすることが予想された。そのため、次のような工夫を行った。
 - ・活動時間を多く確保するために、開会式やオリエンテーションを午前中にして午後からはすぐに活動ができるようにプログラム構成をした。
 - ・参加者に活動時間を意識して行動してもらうために、日程表を紙で大きく掲示し、夕べのつどい後と朝のつどい後に視覚的にわかりやすいようにアナウンスをした。
 - ・参加者が活動場所を把握できるように、所内各所に案内掲示をするとともに、法人ボランティアが案内をした。
- 本事業の初日の午後の選択活動では26名の法人ボランティアに指導補助を依頼し、参加者の安全管理に努めた。また、夜の活動と2日目の企画・運営は、「家族同士の交流ができるプログラム」を全体のテーマとし、それに沿ったプログラムを構成した。職員からのアドバイスも所々で行ったが、ほぼすべての企画・運営を任せることで彼らにとっても学びの場となるように配慮した。
- 法人ボランティアを、前日から準備のため入所させ、一人ひとりが明確なねらいを持って参加できるようにした。また全体でねらいの共有とふりかえりを行うことで、自らの行動を見直したり、今後の活動の意欲につなげたりすることを意識した。
- 法人ボランティアには、当施設での活動が初めての学生もいた。そこで、前日の準備では、1日目の担当の活動について、参加者に不安を与えないよう当施設職員が活動の仕方、安全管理について指導した。

(7) 安全管理のポイント

- 屋外で実施する活動については、前日にコース整備を行い、安全確認を行った。
- 初日の選択活動では、最初に名簿で名前と人数を確認し、参加者の把握に努めた。
- 屋外での活動については、緊急時の連絡体制を整え、無線で細かな連絡を入れるよう努めた。

- 選択プログラム「冬のお星さま観察」で三瓶自然館サヒメルに移動する際に、当施設職員と法人ボランティアが道案内、誘導を行った。
- 朝のつどいで、参加者全体に健康チェックを行い、参加者の体調の把握を行った。

(8) アンケートの満足度・主な記述

満足度（参加者 50 家族中）

満足 42 家族（84%） やや満足 8 家族（16%）

やや不満 0 家族（0.0%） 不満 0 家族（0.0%）

- ・ 学生ボランティアのたくさん凝った企画で盛り上がり、楽しかったです。かんじきハイキングでは、指導員の柳楽先生の詳しい説明で、今までとは全く違う三瓶を体験することができとても良かったです。自然を身近に感じられたよい時間を過ごせました。
- ・ 3年目の参加になりました。子どもたちが冬になったら行こうねと、とても楽しみにしています。今年も参加できてよかったです。
- ・ 大学生のお兄さん、お姉さんとの交流は、子どももとても楽しみにしており、お互いの成長にとっても役立つと思います。今後も相互交流できる事業を続けてください。
- ・ 学生ボランティアによる独自企画も内容が充実していた。今後も続けて実施していただきたい。
- ・ 家族でゆっくり遊べる機会を与えてもらってありがたかったです。だから起きてくる子どもたちが、今朝は自分で起きて自分でお片づけしていました。親子でメリハリのある休日を過ごせました。
- ・ 息子たちの自立が少しみられました。
- ・ 規則正しい生活ができ、子どもたちにとって良い体験でした。

9 成果と今後の課題

<成果>

- 標準生活時間を守ってもらうために、つどいや、オリエンテーションで何度も活動時間を伝えたことで、参加者は時間を意識して行動したため、すべてのプログラムを滞りなく進めることができた。また、参加者にも規則正しい生活や、他人に迷惑をかけず早めの行動をすることを意識させることにつながった。
- 法人ボランティアが企画・運営するプログラムについては、企画の話し合いの段階から職員が関わり、安全管理、進行について確認しておくことで、当日スムーズに活動を進めることができた。
- 26名の法人ボランティアが事業に参加したことで、手厚い支援が可能となった。また、プログラムの一部を企画から運営まですべて任せることで、法人ボランティアにとっても大きな学びの場となった。
- 法人ボランティアは、参加者の中に自然にとけこみ、参加者同士をつなげる役割を担い、家族同士や他家族との交流も促進できた。

<課題>

- 毎年募集定員を大幅に超える応募がある。そこで来年度は、過去の利用者にはダイレクトメールを送らずに新規の団体を中心に広報をしていくことで、新たな利用者を発掘していきたい。平成26年度の広報先はあらためて検討したい。
- 平成25年度で本事業は7年目の継続事業になる。1泊2日のプログラムが例年踏襲されており、パターン化している。より教育的な効果を上げるために平成26年度は再度プログラムを検討したい。

- 今回、法人ボランティアが企画の打合せをする際、集まる機会が設定できず、綿密な打ち合わせが難しかった。また今回は大学の学期末試験とも重なったこともあり、十分な打合せができなかった。平成 26 年度以降、当事業の開催日の変更も視野に入れたい。

10 普及計画・普及実績

島根県内の報道機関に広報した結果、ケーブルテレビ 1 社が事業の募集を報道し、参加者の利用や事業内容の周知につながった。またホームページ上に要項や事業の様子などを掲載することで事業内容を社会に広く発信することができた。

(担当 渡邊 絵里子)